慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リシェ総合文化史論 下巻, (シャール・ リシェ原著, 間崎万里譯)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.172(354)- 174(356)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0172

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かつた祕密が大戰後暴露せられたため新資料によつて全く書き改められ、その全貌が際立つて明かにされた上、新に六章百八十一頁が書き加へられ、世界大戰の前奏曲たる兩度のバルカン戰爭に於ける利益分配に絡まる紛糾せる事件が鮮かに解明せられ、世界大戰を說く諸章に於ては、列强の軍擴とサラエヴォの事變から生れた波瀾重疊の外交戰、大戰の破裂からバルカン諸國の向背と日伊米の參戰、ロシヤ兩度の革命と休戰外交、巴里會議とヴェルサイユ平和條約及びその他の諸條約が說かれてゐる。この下卷に於ては六號活字の割註が著しく增加し事件の結末や諸著から引用しての批評が微細の點まで加へられてゐる。又固有名詞和洋對照表の外、卷末には組方はも少し工夫ありたいと思ふが、前回希望して置いた索引を新に附加し、又全卷を通じて上欄に小見出しを附したることは舊著に比し著しく讀者に便利を與へてゐる。

要するに、全卷を通じて史實が程よく按排せられ、一貫して讀むのに何等の凝滯を覺えしめない敍述の方法は、斯學に精通せる林博士にして始めてなし得る處であらう。この名著によつて、昨今八釜しい『非常時』とか『一九三五、六年の危機』とかいふ言葉がどうして起るのか。軍事費の膨脹が非常時を作るのかそれとも非常時なるが故に軍事費を膨脹させて他を省みないのであるか。それ等について的確な判斷を下し得る基礎的知識が與へられる。我等はこゝに本書の恩惠に浴し得ることを欣幸とする。各卷定價三圓五十錢。（間崎万里）

リシェ綜合文化史論　下卷

（シャール・リシェ原著　間崎万里譯）

綜合文化史論の上卷は既に昭和八年に出版され、讀書界に多大なる歡迎をうけたが、今また其の下卷が上梓されて、普ねく歷史學徒の待望に添ふことゝなつた。蓋し斯かる名著の完璧なる邦譯が公にされたことは、我が西洋史學界の慶事として特筆しなければならない。

我等は既に上卷に於て平和主義と個人の尊重と而して科學に對する絕對的信仰とを基調とする著者獨特の史觀に接することが出來た。そこでは太古からフランス大革命直前までの時代が著者の犀利なる史眼によつて解剖され批判され、而かも最もよく綜合されてゐる。上卷に見らるゝ斯の如き特色は、フランス革命より世界大戰までを敍述した下卷に於ても遺憾なく發揮せられ、上下二卷よく首尾一貫した世界史が構成されてゐるのである。

リシェは第十九世紀を以て科學の時代であるとする。從つて氏の科學尊重の精神は下卷に於て最も强く示されてゐる。卽ち著者によれば、人類世界が今日の如き驚くべき力を得たのは、科學とそれを應用せる工業の賜であり、政治を改革し之を統制し而して其の弊害と過誤とを矯正し得るものは科學の敎育のみであり、更に二十世紀の新社會は絕對に科學を信賴する時にのみ必要な進步を遂げ得るものであるとするのである。

既に上卷に於て印刷機の發明が人類史上に新舊兩時代を劃せり

と斷じ、印刷機の無かりしが故に思想の傳播の極めて緩漫なりし時代を舊時代と呼び、印刷機によつて一人の思想が忽ち數多の人々に傳達され萬人結束の力を得た時代を新時代なりと論じた著者は、鐵道も亦た世界を二つの時代に分つたと言ひ、科學の應用による交通並に通信機關の發達は、人類の共同を原理としてよりも寧ろ事實上にて於て齎らしたと述べ、斯くして人類の生活に國際的共同の必然的なる所以を指摘し、人類は世界的協力によつて、より文明的なる社會、より自由なる個人、より寛大なる人間性を築くであらうと述べてゐる。

また著者の專門である醫學については、その敍述は最も詳細であるが、就中、種痘の發見者たるジエンナーや病原體の發見によつて醫學に革命的進歩を齎らしたパスター等の功績を讃へ、豫防醫學の發達は人間の愚行が戰場で殺した以上の人命を救助したと論じてゐる。

元來平和論者たる著者が、國際聯盟を以て「最も偉大なる進歩」と觀るのは當然であり、國際仲裁々判の制度が如何に多くの重大問題を解決し得て、國際間の平和を維持するに役立つたかを强調するのも肯かれる。西洋史上に最も華々しい大ナポレオンの戰爭が、リシエ氏に於ては只だ非難の對象に過ぎないのも尤である。ナポレオンの出るに及んでフランスの戰爭は最早や祖國の防禦でも自由の勝利でも人類の解放でもなくなり、たゞ掠奪となつたといふのが著者の見解である。またロシヤ遠征に失敗したフランス軍の慘狀を敍しては、「この退却こそは若い人々に戰爭を憎み征服者を嫌惡せしめんがため、倦まず繰返して物語られねばならぬ災禍の一である」といひ、却つて所謂小ナポレオンが其の民族主義の故を以て賞讃されてゐるのも皮肉である。一八六〇年イタリーからサヴオイとニースを割取するに當つて、その地に實施した人民投票を以て、ナポレオン三世の「全く純眞な榮譽」とするのがそれである。

斯の如く專制君主が彼一個人の名譽の爲に、幾多の尊い生靈を犧牲に供し、國家の荒廢を齎したほかに、何等の利益も見出し得ない無謀な戰爭は非難するけれども、自由の爲に戰つたフランス大革命時代の對外戰爭の如き、又は植民地の自由と權利との爲に蹶起したアメリカ獨立戰爭の如き、さては國民統一の爲にイタリー人の奮起した對墺戰爭の如きは何れも正義の戰爭なるが故に是認するのである。永遠の平和は人類最大の理想であり、戰爭そのものは極力排斥せらるべきものではあるが、然かも斯の如く正義の爲の戰爭はこれを承認するに吝でない。同樣に武力による征服も、未開人に光明を齎らし惡疫や內亂の爲に疲弊した住民に安寧を與へたものは、例へばルイ・フイリップによるアルジエリヤ征服の如く、單にこれを是認するの程度に止らず、これを以て北アフリカにアラビヤ・フランスの大植民國家の建設された光輝ある端緒であると賞讃するのである。

また著者の日露戰役に對する見解も注意に値する。彼はこの戰爭が日本にとつて東洋の平和を確保せんが爲の正義の戰爭であつたことを特に認めてはゐないが、日本の勝利の原因を正當に指摘して、「日本が一八六九年以來進歩主義をとり、ヨーロッパの文明を多く取り入れ、しかもその人種の傳統的精神たる忍耐、執拗、

國際紛爭史考（板倉卓造著　中央公論社發行）

他人の著述を正しく批評し得る爲には評者は著者と同等或はより以上の學力・識見を持つことが必要條件である。今私の場合には、この二つの中の何れの條件をも備へてゐない。從つて、私は全く評者としての缺格者であるから、たゞ恩師の著述を紹介し、讀後感といふ樣な私自身の感想を述べさせて頂くことにする。

本書には十六件の國際紛爭事件が敍述されてゐる。日露戰爭關係の紛爭事件三件、世界大戰關係のもの四件、外交上の慣例に關する事件六件、其他三件である。

先づ本書の第一の特色は記述の平明、行文の流麗なることである。元來法律關係の著述には、文章がぎごちないので讀者をうんざりさしてしまふ物が非常に多い。この結果、法律書は固いだけで無味乾燥のものであるといふ一般的な考へ方を社會の人々に植ゑ付けてしまつた。然し、本書は全くこれに反し、著者がその序文中に述べられてゐる樣に、「寢轉んで讀」み得る柔かさを持つてゐる。この點は先づ讀者に、小說を讀む樣な長閑な心安さを以て接することを得せしめる。

第二は材料の選擇が當を得てゐることである。國際紛爭事件の中には、法律的觀點からすれば興味はあるが、一般讀者には更に面白くないものが多い。專門家以外の人々の興味を惹く爲には、事件の內容が相當の變化を持ち、讀者の好奇心を湧かしめるものでなければならぬ。本書に收錄せられた事件は何れもこの條件を

規律、死を恐れぬ氣風を失はず、陸海軍のよく統制され、堅忍不拔の勇氣を示した」といひ、また戰後の獲得については、「完全な勝利を得ながら日本人はその勝利に於て謙讓だつた」と述べ、日本の獲得が不釣合に少なかつたことを言つてゐる。更に注意すべきは、「この悼ましい戰爭はロシヤとヨーロッパの値打を下げた」と斷じ、三億のヨーロッパ人と六億のアジヤ人とは何等共通の記憶も希望も持たない明らかなる對立であると述べてアジヤ民族を警戒してゐる點である。

以上は本書の特色についてその一班を述べたに過ぎないが、平和主義や國際主義を强調する本書は同じく間崎教授の譯筆に成るヴオルフ氏の民族文化史が軍國主義、國家主義を幟標とするのと好個の對照をなしてゐる。同教授が西洋史の文獻中、かくの如く特色あるものを擇んで譯出せられたのは、勿論我が國の歷史教育に資せんが爲であつて、本書の如き良書を熟讀玩味することによつて初めて歷史事實の生きた解釋法を學ぶことが出來る。譯文についてはそれが詩的な流麗さと學術的な正確さとを兼備した最も勝れたものであること、改めて呶々するを要しない。卷末には上下二卷を通じての和洋兩樣の總索引が附せられ、上卷にこれを缺いた不便が除かれてゐる。斯かる良書の公にせられたことを慶とし、譯者の勞に敬意を表し、弘く世の研究者、教育者、讀書家に一讀を薦むる次第である。（東京刀江書院發行、定價上製三圓、學生版二圓五十錢）（有賀春雄）